

新潟職能短大通信

〈着任の二挨拶〉

この度、新潟職業能力開発短期大学校に着任しました校長の岡本明憲と申し上げます。どうぞよろしくお願ひいたします。

さて、着任後の初仕事として四月五日に第十九回の入学式を挙行し、私からは、以下のような趣旨で歓迎のことばを述べさせていたいただきました。

第一に、社会で通用する専門的な知識と確かな技能・技術を身につけること。
第二に、お互いの人格を尊重し、議論して交流を深め人間として大きく成長すること。

第三に、「安全第一」これが社会を生きぬく上での基本であること。

私たち教職員一同、厳しさの中にも愛情を持って指導しますので、皆さんは、「明るく」、「楽しく」、「元氣よく」、そして「常に前向きな気持ち」で勉学に励み、一日も早く新しい環境に慣れ学生生活においてキラッと輝く自分に磨き上

げ、立派な社会人となつて巣立つて頂きたいと思つております。

最後に、微力ではありませんが新潟県民、新発田市民に早く溶け込み人材育成面で貢献できるよう努力いたしますので、関係者各位のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願ひいたします。



入学式 2010年4月5日

新潟職業能力開発短期大学校

校長 岡本 明憲

「大倉翁と新発田」(五)

川瀬勝一郎

「大倉屋鉄砲店」開業

翁は乾物商を営んで略十年、ある日横浜の地に足を向け蒸気船を見て一種異様な感じが起こつたという。動乱を予感し「何たかある重いものをもって胸を押し付けられるようであつた」と語っている。この時、鉄砲商の開業を思い立つたのである。鉄砲商の開業はこ

のように社会の動きを肌で感じ、鋭い感に裏付けられたものだった。
翁の行動は早かつた。上野の乾物店を閉店し、八丁堀の鉄砲商小泉屋忠兵衛の店で見習いを始め、仕事を一通り覚えるとすぐ「大倉屋鉄砲店」を開店したのである。慶応三年二月、翁三十歳であつた。世の中は物情騒然、幕府も各藩も洋式の兵器で訓練し始めたので、注文は沢山あつたが競争相手も多く、鉄砲商は百軒近くにもなつていて競争は厳しかったという。翁は「迅速、正確に売買して注文主に満足を与える」こと

を大切にし、「注文があれは夜中でも約束の駕籠を呼び、現金を駕籠の座布団の下に隠し、護身用のピストルを身に付け、危険を冒して横浜の商館へ走つたものだった」と語っている。

鉄砲商として数多くの取引のなかで、慶応四(一八四八)年五月、上野の彰義隊に呼び出された時の商人としての度胸や、明治二(一八六九)年二月、津輕藩に鉄砲二千五百挺の取引の際の責任感と冒険心など、翁は鉄砲商の頃の思い出をしばしば語っている。

そのころの鉄砲商の中には、嘘をついて不良の鉄砲を高価に売り付けたりした者もあつたというが、大倉屋の信用は固く取引は順調に発展した。



ペリーが来航したころの鉄砲